

北海道大学スラブ研究センター夏期国際シンポジウム

「中央ユーラシアの地域的・超域的ダイナミズム

: 帝国、イスラーム、政治」

宇山 智彦

近年スラブ研究センターでは、二人の専任研究員（宇山智彦、前田弘毅）が中央ユーラシアを専門とし、何人かのロシア専門家も中央ユーラシアに関わる研究を進めるほか、八人の大学院生がこの地域の研究に取り組むなど、中央ユーラシア研究を積極的に展開しつつあります。2005年七月七日・八日に開かれた夏期国際シンポジウムは、センターでの中央ユーラシア研究にかかわるこれまでで最大のイベントとなりました。シンポジウムは基本的に英語で行われ、ロシア語でなされた報告については英露同時通訳が入りました。

このシンポジウムが全体として立てた課題は、ロシアとアジア、ムスリム世界と非ムスリム世界にまたがるフロンティア領域であると同時に、個々の地域が顕著な個性を持つ中央ユーラシアで、国・地域単位の動きと、それらを越える動きがどう相関しているかを検討することでした。そしてこれに沿って、近現代史研究や現状分析の中で近年焦点となっているテーマをピックアップし、六つのセッションを立てました。

初日の第一セッション「中央ユーラシアの近代知識人」では、知識人の活動を、現地の文脈とロシア・ソ連全体の状況との関係の両面から議論しました。まずアディーブ・ハーリド氏（カールトン・カレッジ、米国）が、「革命の魅惑：中央アジアの知識人（1917-1924年）」と題して、二月革命がムスリム知識人を行動に駆り立てたこと、オスマン帝国の敗北をきっかけにジャディードがヨーロッパ的リベラリズムから反植民地主義に転じたこと、ソヴェト政権下でジャディードが集権的な宗教機構を作る試みを続けたことを述べました。マンベト・コイゲルディエフ氏（カザフスタン教育科学省歴史・民族学研究所）は、報告「アラシュ運動とソヴェト政権：立場の相違」で、ロシア革命期のアラシュ・オルダ自治運動の参加者を中心とするカザフ知識人たちが、1920年代のソヴェト政権指導者（特にゴロショーキン）から敵対的な処遇を受けたこと、それにもかかわらず民族政策の見直しを求めて活動を続けたことを語りました。小松久男氏（東京大学）の報告「ロシア統治下の『イスラームの家』：トルキスタンのムスリム知識人の認識」は、少なからぬ知識人（特にウラマー）がロシア支配下のトルキスタンを*Dar al-Islam*と考え、アンディジャン蜂起を非難したことを、

ペルシア語などの一次史料に基づいて指摘し、またアンディジャン蜂起そのものやトルキスタン自治の思想についても新しい知見を提示しました。

第二セッション「ソ連期中央ユーラシアにおける強制移住」では、特定の民族に強制的に地域を越えさせた政策がどのような結果をもたらしたかを検討しました。エリザ=バイル・グチノヴァ氏（ロシア科学アカデミー民族学・人類学研究所）は、報告「カルムイク人強制移住（1943-56年）：烙印を押された民族」で、カルムイク人が強制移住中および移住先で味わった苦難や差別と、彼らの適応の努力および民族的一体性強化の過程を、身体性、噂、植民地主義的態度などをキーワードとしながら、聞き取りに基づいて細やかな視点で描き出しました。半谷史郎氏の報告「ブレジネフ期の民族政策：強制移住民族の位置づけをめぐる」は、ドイツ人、クリミア・タタール人、メスヘティア・トルコ人の復権と帰郷を求める運動と、それに対するソ連指導部（特にKGB）の「アメとムチ」両様の対応（ドイツ人とクリミア・タタール人の自治領域を中央アジアに作る試みを含む）を検討し、あわせてブレジネフ期にカザフ人の民族意識が高まったことを指摘しました。

第三セッション「ポスト・ソ連期中央ユーラシア諸国の政治体制」では、ソ連という一つの国から分かれた諸国に成立した多様な政治体制を、二カ国の事例から検討しました。アレクサンドル・マルカロフ氏（エレヴァン大学、アルメニア）は、「アルメニアにおける体制形成と発展」と題して、アルメニア憲法の制定と改正をめぐる議論を、大統領と議会の権限という観点から詳細にまとめ、同時に議会の構成においても、大統領派が占める勢力には時期によって大きな変動が見られることを指摘しました。ドスム・サトバエフ氏（アセスメント・リスク・グループ、カザフスタン）は、報告「カザフスタン政治エリートの内的構造の分析：政治リスクレベル評価の観点から」で、カザフスタン政治および政治エリートの変化の時期区分を示したうえで、エリート内の諸グループ（通俗的に言われるような、ジュズや部族に基づくものではない）の存在を指摘し、権力の個人への集中がもたらす危険性を説きました。

二日目の第四セッション「イスラーム復興—— 国境を越えた動きか、国内問題か ——」では、国・地域を越えた現象の代表例として語られがちなイスラーム復興を、各地域の文脈から具体的に検討しました。まずギオルギ・サニキゼ氏（グルジア科学アカデミー東洋学研究所）が、報告「グローバル対ローカル：現代コーカサス地域におけるイスラームの復活（パンキシ峡谷の場合）」で、チェチェン系キリスト人が主に住むパンキシの複雑な宗教史（ロシア帝政期の部分的なキリスト教化を含む）を整理し、近年までイスラームが決定的なファクターではなかったことを示したうえで、いわゆるワッハービーの出現が峡谷の生活とグルジアをめぐる国際関係にもたらした緊張を描きました。アシルベク・ムミノフ氏（タシケン

ト東洋学大学、ウズベキスタン [当時]) は、報告「ソヴェトおよびポスト・ソヴェト中央アジアにおける地方的イスラーム伝統に対する原理主義者の挑戦」で、ソ連時代の公式イスラームに現れていた原理主義的要素を、反スーフィズム・反ハナフィー派的なアラブ人イスラーム学者Shami-damullaが宗務局周辺に及ぼした影響を通して示し、また現在まで活動する原理主義諸派について解説しました。菅原純氏 (青山学院大学) の報告「リサーラの『復活』: 現代新疆における民衆イスラーム出版物」は、リサーラ (職人の祈祷ハンドブック) が東西トルキスタンで伝統的に共有されていたこと、新疆では宗教弾圧の時代を経て1980年代に現代語版が謄写印刷で現れ、さらにはウイグル人の「古典」として公的にも出版されたが、後者は2001年に危険な宗教文献として焚書にあったことを述べました。

第五セッション「ロシア帝国と中央ユーラシア」では、ロシア帝国の政治とロシア人の視線が中央ユーラシア諸地域に対して持った意味を議論しました。長縄宣博氏 (東京大学院生) は「マクタブか、学校か? ヴォルガ・ウラル地域のムスリムと義務教育導入問題」と題する報告で、1905年革命後に文部省とゼムストヴォが初等教育拡大の主導権を争うという背景のもと、ジャディード知識人やマクタブ教師、イマームらが、初等教育の中心をマクタブとするか公立学校とするかをめぐって展開した論争を分析し、ロシア市民であることとタタール人であることの関係性や、公共空間としてのマハッラについても論じました。マルガリータ・ヂコヴィツカヤ氏 (米国議会図書館) の報告「ロシアの植民地主義的態度と視覚文化: 初期の写真における中央アジア」は、帝政ロシアの写真家プロクーディン=ゴルスキーが撮った写真 (カラー写真を含む) を題材として、ロシア人が中央アジアに対して持っていた偏見、文明化の役割の主張、大国意識を指摘しました。宇山智彦 (北海道大学) の報告「個別主義の帝国: 中央アジアにおけるロシアのキリスト教化・兵役政策」は、帝政ロシアの軍人・官僚の一部が中央アジア人の同化のためにロシア正教の布教と徴兵制の導入を構想し、長年にわたり議論したものの結局実現しなかった経緯を追って、政府が中央アジア人に対して持っていた不信感と、民族・地域により多様な政策をとる個別主義の思考を、専制体制の特質やオリエンタリズムの文脈で論じました。

第六セッション「国境とマイノリティ」では、地域と越境のダイナミズムがよく現れるホットなイシューを取り上げました。セルゲイ・ゴルノフ氏 (ヴォルゴグラード大学、ロシア) は報告「ロシア・カザフスタン国境の麻薬密輸: 難問と応答」で、ユーラシアに複数存在する麻薬密輸ルートの中でのカザフスタン=ロシアルート的位置づけ、密輸される麻薬の種類、密輸の組織形態、取られている対策を、それぞれ類型化しながら説明しました。岡奈津子氏 (日本貿易振興機構アジア経済研究所) の報告「越境ナショナリズムは国家安全保障への脅威か? カザフスタンにおけるウイグル人とウズベク人の事例」は、二つの少数民族

集団がカザフスタンと中国、ウズベキスタンとの関係に翻弄されながらもカザフスタン内での適応に努め、国境への脅威にはなっていないことを、現地調査に基づいて論証しました。

参加者総数は約115人で会場は超満員となり、フロアからの質問も極めて活発でした。日本で外国語で開く会議では、往々にして外国人の発言が中心になりがちですが、今回は日本人の若手研究者・院生たちがフロアからの発言者の中心で、日本の中央ユーラシア研究者層の成長ぶりを印象づけました。この地域に対する関心が高まっている時期に、世界から第一線の研究者を集めてシンポジウムを開けたことは、大変幸せでした。シンポジウムの報告集は、後日センターから書籍として刊行（ウェブでも公開）される予定です。

また、外国人報告者のうち八人はこのあと東京に移動し、小松久男氏・渡邊日日氏のご協力により東京大学で開かれたシンポジウムにも参加しました。

（北海道大学スラブ研究センター）